たたかいのなかから

五・三〇声明にかえて

同志への手紙

日本赤軍

1

闘いつづけている同志、元気ですか？

八年目の、五月三〇日、リッダ空港襲撃闘争の日を迎えています。かって、そしてこれからも、一つの目的に向け共にまちがいをただしあっていくために、ますます、同志との連帯の意義が増大しています。レーニンも、そうであったように、そして、私たちの国際的な同志、友人がそうであるように、自国の革命戦場で闘う同志と、外から続けあうことのむずかしさを、私たちも、幾度も経験してきました。場所的な条件に規定され、日本世界の革命の利益が、いったい今、何を実現することが問われているか、価値観が、一つになりえていないために、異なる情況の中に拝きし、矛盾を発展のエネルギーとして統一しあえず、相互の有利な条件を生かすことができていません。総じて、自国の外にいれば、世界的な情勢を軸に、トータルに自国革命の戦略的な方向を、とらえやすいと同時に、具体的な実状が、手にとるように把握しえない困難さに直面します。「文通のために……事実や、出来ごとについてばかりでなく、気分についても、連動の中での日常の『おもしろくない』ありふれた茶飯事的な側面についても、情報をあたえるために、書くことを、われわれはおぼがいする。諸君は、国外に滞在したことがないので、われわれが、このような手紙をどんなに必要としているかを想像できないかもしれない」「もちろんだれにでも書く能力と興味があるわけではないが、しかし……できないといってはならない。したくないといいたまえ」こんなにプリプリ怒って不満をいっているのは、（私たちも、何度か同志に不満をのべたけれども）レーニンの一九〇四年の姿です。

逆に、自国の内部で闘っていると、目先の現象的なものに目をうばわれがちで、見通し、何のために、今、闘っているのかを見失い、一つの目的のことを、自己目的化しがちです。こうしたことが、私たちのまわりにいる友人たちの組織でも、矛盾、不信そして、決裂と本質的に問題を問えずに、組織的な分解をもたらす例が多くあります。

かつて、一つの組織を形成し、自国の革命の嵐のために余儀なく亡命した人々が、亡命中の闘いの中で、ある人はユーロコミュニズムに、ある人は、ソ連のあり方に、またある人は、中国風に確信をつかみ、「確信」のために、自国の革命をバラバラなものにしている事実を、目の前にみます。そして、私たち自身も、国境を越えたとたんに、共産同赤軍派と革新的な距離を、思想的距離としてきずなを失いました。「何か」が、欠けているために、このことが何度も克服しえないで、世界中で、日本で、くりかえされています。日本で、くりかえされてはいないと、同志は考えますか？国境を越えるまでもなく、東京や大阪という地理的条件や、獄中と獄外や、目前の課題の前で、価値観が分裂していくことも、本質的には、同じ問題が根本にあります。何のために闘っているのか、何が、「正しい」という基準なのか、そこがしっかりしていなければ、本当に目的を実現するために、自分の頭でしっかり考えて、力を一つの方向に結集しあえません。

同志。同志は近頃、社会党と、共産党の革新共闘が崩れ、対立にまで至っていることを悔い、憤慨して、手紙をくれましたね。観点を変えて考えてみましょう。

「党利党略中心の共産党とはやれない」という社会党の主張も正しいでしょう。「革新の共闘を破壊したのは社会党」という共産党の主張も正しいでしょう。誰にとって正しいのか？社会党にとって社会党の主張は正しく、共産党にとって、共産党の主張は正しいという一面的正しさであり、それは、全面的正しさではありません。皆、個々、正しいことを主張しあい分裂します。個々の正しさに固執しても、そこには、全面的正しさをみいだすことができません。全面的な正しさとは、敵の前で、力を一つにできるように、どうしているのか？いくのか？ということから戦略的に考えなければなりません。そういう意味でいえば、「革新共闘が対立になった」というのが、事実の中心であり、その革命にとって有利でない現実を導いた根拠を、人のせいにせず、自己の革命化にむけて問う観点さえあれば、改造しあう点、例えば、共産党の統一戦線に対するまちがった考えを、共産党の人々がただす契機にもなっていくでしょう。日本共産党はいいことも、たくさんしていますね。しかし敗北しています。日本共産党は、日本共産党を排除する勢力に対して排除の論理でこたえることによって反共攻撃を防衛し、原則を堅持するかのように考えています。

どのように排除されても、攻撃されも、敵対行動をとられても、いいじゃありませんか。自分に敵対しているか否かが統一戦線の基準ではないのですから、形態をゆずって、例えばちがうあり方で、参加し、中味をとるよう努力しなければなりません。批判を返すことよりも、そちらが、党の中心におかれなければならないと思います。共産党なのに、政党政治の枠の中で政権構想としてしか統一戦線をとらえていないことが問題ですね。個々にとって正しさを主張する時、そこには、正しさの理はあります。しかし、それは基準にはなりません。「全面的正しさ」ということを、考えてみましょう。その価値観の中に、勝利の根本があります。

同志は、「党は、政党も新左翼もダメだ。だけど、やっぱり勝つには、党が必要だと思う。自分のところで精一杯闘っている力を、どうしていったら良いのか？」と、問いつつ「やるしかない」というところで考えていますね。そんな同志に、「最後の党をつくろう」と、私たちが言ったら笑いとばされる同志の顔がうかびます。根本から考えを変えて、力を結集していけば、それができると確信しています。そのことを、丁度、この機会に、同志へ、私たちの総括と見通しとして提起し、共に、力をあわせていきたいと思います。

2

日本の同志、人民から学んできたように、イランで、ラテン・アメリカで、パレスチナで、アフリカで、アジアで、闘っている人々からも私たちは、多く学んできました。そして、ささやかな私たちの経験を、そういう人々は、貪欲に学ぼうとします。いわば、必要に迫られたその学びあいの中に、国際主義が着実に進んでいます。必要に迫られた切迫した情況って一体何でしょうか？敵の前に座って理論を考えるとか、本屋にたちよって文献を探しまわるとか、そういうことと次元、いわば観点が、ちがいます。「変える勉や、兄弟や、民族の自由がほしい」「自己の運命の決定者として、自分自身の主人でありたい」「人々と共に、助け合って生きていきたい」そうなっていない現実を、どう変えたらいいのか？その切実さの中で、共に教訓や、経験を提起しあいます。もちろん「そうやっているから失敗するのだ」とか言い合う激しさや、うけとめるには、面目に、かかわることもあるでしょう。でも、勝利するために、大多数の人々が、共に助け合い生きるために、「今をどう変えていくのか？変えなければ敗けつづけている」という事実の前で謙虚さ、真剣さがいつも「こだわり」をりようがする力としてあります。

一番大切なことは、自分たちが絶対正しいという考えを疑って進むことです。自分たちが正しいと思い込んで進めれば、頭の中に価値があり、現実を変えることにたいした価値を、おかなくなり、正しい頭の中を革命に文学化することに終始することっけいさに結果します。自分たちが、もうわかっていると思えば思うほど新鮮な現実、創造性を失います。何故、これを強調するかといえば、勝利した、または、勝利しつづけている革命と、敗けつづけている革命の根本にかかわる問題だからです。

同志。かつてマルクスが「哲学者たちは、世界をただ様々に解釈してきただけである。肝心なのは、それを変革することである」といいましたね。毛沢東は、「革命の根本問題は、哲学」ともいいましたね。革命は、現実に対する見方、考え方から、何をめざして、そのために今を、どう変えつづけていくのか？この現実をかえることの重要性が、排除されたところには、何の革命性も育ちません。自分たちの現実の見方が正しいとか、目指していることの正しさを、論証することに価値をおいている姿は、やはり頭の中に価値をおいている姿です。「正しさ」に立脚して、そのために今をどう変えつづけていくのか？という行動と、行動に媒介された理論には価値があります。何故なら、現実を変えることに価値をおきそのために闘う中で、主観を、とりかえることが可能だからです。現実を変えるための理論は、価値があります。レーニンのように。

同志が、「党派は、いっていることと、やることがちがう」と批判するように、どういっているかではなく、どうやっているかに、実際の姿があります。人民のため、革命の勝利のためのつもりでも実際の姿が、どうも党利党略（内ゲバもそうですね。）であれば、やはり頭の中の正しさ中心で、現実をかえることが中心でないために自己肯定している姿です。そういう党は、いくらでも、つくれるけれども、また、革命を敗けつづけたままにしてしまう根拠にすぎません。

たとえばアフリカの同志の話は、教訓に富んでいます。二〇年前に、闘いを始めたころ、百パーセントのマルクス主義者や、マルクス主義と何ら関係のない人々が、バラバラに闘っていました。百パーセントのマルクス主義者と自称する人々は、マルクス主義を信奉しない人は、大衆くらいにしか考えないし、マルクス主義と関連のない人は、民族の利益のことしか考えない偏向もありました。現実はどうなったのか？現実を変える力は何か？敵の攻撃の局面局面で、今を変えなければ、闘えないという実態から、統一にむけて、アフリカの同志は、走りまわりました。解放戦線としての出発です。戦線は、一つの基本目標で統一されていますが、個々の党や、組織のやり方はバラバラです。今、何をすることが必要なのか？そこにすべての力を結集して、アフリカの同志たちは、闘ってきました。正しい主張は、もらったらいいし、まちがった自分たちは変えたらいい、敵に勝利し、人民がすこしでも前進するために、すべての力を注いだ結果、その人々は、今では、解放戦線の主力部隊になっています。人民のために奉仕するというのは、そういう姿だと思います。よく、統一にむけて五年も十年も、それ以上も、ねばりづよく働きかけた、その時のエピソードなどを聞いて、私たちも多くの教訓とするところがあります。

3

同志、日本の革命は、何故、敗けつづけているのでしょうか？世界的に、日本も含めて資本主義支配を困難にする人民の自覚め、決起、社会主義の勝利があり、客観情勢は、有利に展開しています。にもかかわらず、指導勢力である党が、革命の指導的勢力として闘いえていないことに根本的弱点があります。まず第一に、党派と名のつくものがたくさんありながら、その存在価値が不明です。第二に、「党」が、実際の姿から出発していないので、現実の戦力たりえていません。第三に、党を中味ではなく、形態で考えていることに問題があります。

第一の問題は、党が何故必要なのかという問題。同志も、「新左翼も政党もだめだ。だけど、やっぱり勝つには、党が必要だと思う」といっていますね。同志は、「党が必要だと思う」というのは、どうしたらよいのか、一歩ふみ出して考え、実践していく必要があります。現実、人々が共に生きられない、人の価値が、金の価値におきかえられているために、安い人と値段の高い人がいたり、物質的にも、恵まれているものと、そうでないものがいる、人としての価値が、そんなところで決まるのはゴメンだ、みんなが共に生き、共に変革しあう社会に、かえたい、これが、同志も、私たちも、単純な革命の欲求だと思います。そして、社会をかえるために、その敵対対象にむかってうちやぶりながら、みなが、力を一つにしていき、一つにしていく過程で、価値を創造しながら、新しい社会で、みなが、主人公として、生きる条件をつくらねばならず、みんなが、力と心を一つにしていかなければ、社会を、かえられません。みんなの力と心、行動と考えを、質的にも、量的にも、一つにしていくには、結集する中心が必要です。中心の役割が党の役割です。だから、党が、中心としての役割をなす価値基準は、とも分散させているのかにあります。それが実践の中で運動の方向を戦略的に、戦術的に統一を果たしているか否かで計られます。中心の役割をなす党は、常に、敵と味方、今、自分のもとに結集しているか否かにかかわらず、階級全体の中心たりうるように、自己を革命化して、中心たりうる役割に向けて、かわっていかなければなりません。敵以外の味方であるべき全体を、どう反映しているのか、自己を批判的にとらえかえせるかどうかが生命力になります。党の革命しつづける姿に反映されて、人々の結束は、ますます、果たされていきます。

ところが、現在まで、私たち自身が、かかわった新左翼、あるいは、旧左翼は、どうだったでしょうか？同志が、ダメだという根拠もその辺にありそうですね。「権利だけを主張する悪質な民主主義者め！」と、新左翼をバ倒する手紙を、旧共産党員からもらったとき、私たちも、耳痛くとらえかえしたことがありました。結局、これまでの党のあり方が、「中心である」という役割ばかりを主張して終っています。自分たちが中心だ、いや我々が中心だと。そう自己主張していないところでも、実践の中では、そういう自己主張の姿がめだちます。味方の戦略的統一にむけて、誠心誠意尽力するから、中心たりうるのですが、何もそういうことをやらず、自分たちの党が中心だという前提にたつ考え方がまちがいをつくっています。階級全体味方全体からみて、自分たちの党的役割を、どう果たしていくのか、つまり、統一にむけて、どう中心たりうるように主体変革を果すのかが、正しい基準です。自

（五面上段につづく）

分たちのもとに結集したものが、革命的だとか、進歩的だとかは何の基準にもならず、あたかも、その自分たち以外は、味方に欲えないという自己中心性があります。階級の中心をつくる問いとしてとらえず、すでに、所属している「党」へオルグするというあり方の中に、分裂を促進してきました。そういうあり方は、ある一時期党派にとりつかれても、去っていくものをふやし、また、反共宣伝を許す原因となります。

第二に、党が実際の姿から出発していないという問題です。実際の姿から出発すれば、現実の関わりから現実を変える力も出てきます。現実を変えることに、最大の力を、注がないのも、そうした、観念的なところに、価値をもちすぎているためです。

実際の姿に価値をおかなかったことは、連赤の最大の敗北の根拠でもあります。今、自分たちは、豆つぶのような勢力であり、共産主義化にむけて、何を克服していくのか？ありのままの姿、強さでなく、弱さを、共通の問題として変えあっていくことが連赤の時、問われていました。共通の弱さを、みんなの問題、自分の問題、人民の問題として変えあっていくことが、必要だったのです。ところが、その実際の姿を、どう変えるのかではなく、あるべき姿、頭の中の価値観から現実をみようとするために、今、自分たちが、何をしているのか、みえないのです。何故なら今、何をしているか（同志を殺している）に価値がなく、雄々しい共産主義化が、今のあとには、つくられるという観念に価値をおき、現状肯定、どう変えるかではなく、現状肯定を、くりかえしてしまいました。

現実を、どう変えて、統一していくのか、そのためにどういう中心たりうる主体の革命を果たすかではなく、自分は座して現実を変えず、頭の中をあれこれ変えて自分の都合にあわせて解釈し、納得する、あの阿Q の姿を、私たちは、忘れないようにしなければなりません。そのためには、まずもって、現実の姿、自分たちの客観的現実から出発しなければなりません。

どんなに高尚な理論、高尚な分析をもっていても、どんなに絶対的な綱領をもっていると自負しても、それが、現実の姿とどういう差があるのか？が問題です。「絶対的に正しいわけだ」、人民の結集がわるいのは、どうも人民のせいばかりではないぞ、言ってるだけで、何もやってないせいかもしれない、絶対的正しい内容に問題があるのかな」と、疑うことから大衆にかわって、自己を点検することです。大衆点検をうける能力を、党が、もつことができるのは、実際の姿に、価値をおくからなのです。そして、その差の中に、党がまちがいを発見し、改革する発展の力が、宿っています。何を言っているかという「つもり」ではなく、何を、やっているかというところを基準に、言っていることの落差を認め、誠実に、それを改造する観点を党がもてるようになれば、日一日、何年か後、序々に、日本の革命が、発展するという確信を同志も忘れないで下さい。

まず実際の姿をみること、認めること、本音と建前といっても良いし、本当の姿から出発して、建前で足もとをみれなくなる自分たちを変えていかないと、党は、いつまでも、現実を、変える役割をつくれないのです。ちょうどそれも、いろいろ党派の機関誌を読んで学習しています。六〇年中期以降、七〇年代の闘いの総括として、新左翼の八〇年代にむけた動き、日本共産党の革新共闘の展開以降の動きがわかります。ブントや毛派の流れの中で、とくに、革一党をめざした統合の動きがたくさんありますね。客観的な情勢の要求というよりも、それに対応する主体上の問題から、活路をみいだすべく、統合が要求されているようです。とくに、いくつかの新左翼世代と、旧共産党の老人同志世代との統合は、興味深いことです。私たちは、新旧世代が、教訓と総括で固くむすばれ、革命力の結集をはかることを、日本革命の継承性を敗北から勝利に転化するために、たいへん必要なことと考え、そのありかたを学んでいきたいと思います。しかし現在の統合のあり方をとらえてみると疑問を感じます。これまでの、戦術、運動的な展開では問えないが故に、思想軸を求めて統合しあうことが、旧世代の結合としか行いえない新左翼の限界を一方に物語っています。同時に旧世代の革命と経験が、日本共産党を、革命しぬけなかった総括として果されていない現状を認識せざるをえません。何故なら、統合の方法論そのものの中に、主体的な敗北の総括が果たされていると考えられないからです。現在の日本の革命は、統一を要求しています。しかし、それは、日本革命を、敗北させてきた自己批判の総括の上に、一義し、自派を否定して解体することを通して、思想的に結集することが、要求されています。組織形態の継承の上には、統合自身なりたちえないのです。

まずもって、実体、相互の主体実情を正しくとらえかえし、言ってきたことでなく、やってきたことの総括を一致することぬきには、単一党形成を果たしえないと思います。

日本共産党、新左翼合めて、「現実を変えるために、みんながどう結集するのか」ということに価値基座がおかれていないのです。「自分たちが、どう正しい主張をしてきたか」を提起しています。その人々の考え方が正しかったかどうかは、革命の価値ではありません。正しかったかもしれないが、実際どう勝つために、かえたのか、党と名のる以上、敵に対決して、味方全体に、どうしたのかが中心問題なのです。そうしないと、客観的には、「正当化」したまま、敵味方の関係は何も変らないという、この現実を変えることができません。

第三に、党を中味ではなく、形態で考えるという問題です。党を形態でとらえているために、階級の党は一つでなければならず「中心であろう」とする、そのひたむきな姿勢そのものが、内ゲバになったり、「連赤」になったりします。レーニンの党も、毛沢東の党も、カストロの党も、形態は、ちがっても、中身は同じだったと私たちは考えています。ピラミッド型でも、アルジェ方式でも、形は、その国々の条件にあわせてつくらなければ敗北します。

新しい社会を今からつくっていくために、階級全体、更には、敵以外の味方にすべき人々を、どういう実践を通して結束させていくのかという、階級全体の、中心の役割の問題です。中心は、実践によってしか、中心たりえません。中心の役割はどういう形態であるか、質的、量的統一を果たす実践的先導者ですから、まず統一されていなければなりません。

目指す社会を実現する方法とその実践に、その党の思想性が如実に示されます。そこに、階級全体をどのように結束させようとしているかの姿があらわれます。そして、その党の内部統一のあり方がまた、階級全体を統一していこうとするやり方と、共通しています。党は、形はどうあれ、中味が一つでなければ力になりません。統一に中心があり、統一する実践に価値があります。敵に対決して力と心を統一しつづけることを通して、一つの有機的意志体として、実践しつづけなければなりません。会社のように、考えがバラバラでも、いわれたことは報酬のためにやるというやり方を学んでいきたいと思います。しかし現在の統合の実践、つまり、自分にとって価値のあることはやるとか、指揮にしたがうことが、形だけのものではなく、中身、つまり、勝利の目標、どういう方法でどう実現するために、今の実践、敵と味方、その中心であろうとする自分たちをどうふえていくのかを、常に実践によって示すことです。党の役割からして党の価値の基準は、戦略的に味方が一つになっていけるかにあります。戦略的に一つになっていくことは、そのためにかたちをととのえることではなく、勝つために、今何が必要かという考え方を常に統一して進むことです。もちろん、価値、考え方が統一されるかどうかは実践に示されます。一つになるためには、現実の一つになっていない根拠をとらえ、一つになるように実践していくことです。一つになれない根拠は、革命の価値が、どこかちがうことにおかれているためです。もちろん、どの党も、「つもり」としては、一つになる気はあり、実際の姿として、一つに全体を結束させる気がないということを示しているのですから、実際の姿から、出発する必要があります。正しい、正しくないという価値基準も、マルクスや、レーニンがいったから正しいかどうかでなく（この考え方も、形態なのです）、味方を統一する方向に進んでいれば正しく、逆にもクソも一緒に一つになるということを私たちは主張しません。組織的合同とか、そういうかたちで一つになることではなく、社会に対する、人に対する、自然に対する考え方を、一つにしていくことです。形態身も統一され、そうして観点を一つにしていけば、中、別々でも、ところが、党を形態で考えれば、今の姿は別にして「中心、前衛であるべき」ために、規約で統制されていなければならず、いかに正しい中心であるかを主張するために、理論化されなければならず、他組織を認めることができなくなります。党の役割は、勝利のためのものです。人民の力を一つにしていく推進者である党がバラバラを再生産します。力を一つにするために、考え方を一つにしていくこと、いきづけるその闘いに思想統一がうまれます。それは、特別な人が統制するのではなくて、考え方を出しあうことと自身、党員みなが統一にむけて統制しあうことになります。党がこの思想統制を中心に、内発的結集によって指揮が統一されていかなければ、確固とした形だけの党、だめな人間は、排除される党、人の中身がかわらず、人が、出たり入ったり、いれかわるだけの党にしてしまいます。

同志、知識や能力は、あった方が、ないよりは、よいことですが、党員の一番不可欠の条件は、どのような時でも敵をうちやぶるために行動を統一し、行動の観点を統一し、自分をかえながら実践することができるかどうかにあります。同志は、だめな党派の現実を語り、自分のところでは、精一杯闘う力を、結集しようが無いなのでしょう、どうやるのですか？自分が、精一杯やるにしても、そこには、価値はなく、必要なことにむけて、どうみなを統一しつづけて実践するのかを、具体的に考えていく必要があります。今、日本革命の全般からいえば、勝つために、敵をしっかり定め、それを、うちやぶるために、今、何をしなければならないのか、国際国内の帝国主義と対決して、味方を戦略的に結集していくために、どういう実践を中心に党を育成するのか？が、とわれています。私たちは、味方の中に、今、党のかたちでなく、中身を、どうつくるのかを中心に考えていくよう、同志に提起します。

4

だから、同志、どういう条件の中で、党の問題を考えてきたのか、どうしてそういう考えに至ったか、いっておく必要があると思います。

まず、七一年段階では、卒直なところ、理論的確信が赤軍派にあったわけではありません。

「先進国プロレタリアートが、唯一世界性をもつ」とか「毛沢東の地方主義、赤軍派の普遍性」だとか、いろいろ、やはり実際の姿ではなく、頭の中の価値を理論闘争として闘っていました、また、行動では、もっとも犠牲性にもえて闘っている自分たちに価値と満足をもっていたでしょう。そういう実態ですから、国境を越えた時から、自分たちの実体に立脚していない論理が役立たず、それを、あれこれ修正手なおしで、つじつまをあわせようとして、敗北し、はじめて、誤りを悟ります。敗北を認めるのは、まだ、たやすいのですが、誤りを認めることは、それよりも勇気のいることです。主観的には、卒直な国内母体への提起は、あやまりを認めよと、自分たちのことは棚に上げて、つまり、総括として提起できず、逆に国内からは、指揮に従えという無内容な怒りをさそい、分裂してしまいました。その時、私たちは、自力でやる闘いにふみだしたのです。決意はそのように高らかに燃えて、自信はなく、自信のない分まけおしみも合めて、日本の人民を代表して闘うぞ、階級全体を代表して実践するぞと、耳をかたむけ、目を開き、学び学びぬく中で自分たちを変えるという闘いから始まりました。今から考えれば、まちがったことも学んだりしてきたことも多くあります。

知識や能力があるわけではなく、特別な人間ではなく、普通の人が革命をやるという、私たちの出発点は、逆に様々な地域で闘っている人々の革命をやる姿と共通していることをむしろ、発見しました。勝つために現実をどうかえるか、そして、変えうる主体として、自分たちをどう革命化していくのか、ここに人民の創意工夫があり人民を代表する普通の人々が、変革しあい、変わっていく姿があります。

しかし一方で、「自分たちは、アラブ戦場で日本人を代表して闘い、国内に闘う党が出来たら合流しよう」と考えていました。しかし、いっそうに、自分たちが望む党はできませんでした。自分たちが、真に、観点を統一し、自分をかえながら実践することができるかどうかにあります。同志は、だめな党派の現実を語り、自分のところでは、精一杯闘う力を、結集しようが無いなのでしょう、どうやるのですか？自分が、精一杯やるにしても、そこには、価値はなく、必要なことにむけて、どうみなを統一しつづけて実践するのかを、具体的に考えていく必要があります。今、日本革命の全般からいえば、勝つために、敵をしっかり定め、それを、うちやぶるために、今、何をしなければならないのか、国際国内の帝国主義と対決して、味方を戦略的に結集していくために、どういう実践を中心に党を育成するのか？が、とわれています。私たちは、味方の中に、今、党のかたちでなく、中身を、どうつくるのかを中心に考えていく必要があります。

私たちは、一つ重事行動が出来たびに、何かやれた気分になっていきました。そして、その、いってみたら自分の力を、わきまえないあり方が、七四年のパリでの敗北、ストックホルムでの被逮捕、自供に結びついています。七四年の連続的な敗北は、多くの学ぶ機会を与えてくれました。同志も、知っていると、記もしてくれましたね、あの時の最大の教訓は、階級の責任は、切っても切れない、一つのものだということです。革命の名において、あやまちを犯せば、人民全体に害毒が及び、ここまで責任をとる、とれると思っていることと自体が、敗北を拡大させる根拠となるということです。たとえば、パリで、私たちのやり方の同志友人が、秘密の二重生活をあばかれ、追放され、暗殺される事態もありました。更に、被逮捕後の屈服、自供が、闘う同志、友人に様々な攻撃の根拠を与えたりしました。私たちは、何という革命の犯罪をつくりだしてしまったのでしょう。「日本赤軍として責任をとります」と口先でしかいえず、指揮にしたがうことしかできません。しかし、指揮にしたものを償えるのは、より正しく、より厳密を強め、実践によって点検をうける方法しかありません。誰かに責任を回避して生きのびる人々は、いつも脱落していきます。しまいに人民のせいにして、正しくない自分たちをもみれなくなります。誰かのせいにして生きのびる貧しさよりも、流れる害毒がどの組織のものであれ、ひきうけて、自分たちの改造に結びつける方が、どれだけ、党と、革命を前進させることができるでしょう。私たちは、その時階級の責任は、一つであることを、だからこそ階級の党は、全体を結集する立場と観点によってしか、つくりえないことを学びました。つまり、敵に対決しようとして犯した革命のあやまり敗北は、主観的に他組織のものであると主張しても、客観的には、自分たちの闘いを左右させるものであること、逆に敵に対決した革命勝利の一歩一歩は、日共の勝利であれ、何々派の勝利であれ、私たちの力となることを、党を一つにしていく闘いと、結びつけて考えるようになりました。

どの指導勢力も、主観はどうあれ、客観的には、人民が結集する中心としての役割を要求され、自らも中心だと役割を主張し、しかし、中心としての役割を全く果たさず存在している以上、人民は、敵の前で丸裸で対じすることになります。現在から、中心としての国際主義を実践する道は、自分たち自身が、力と心を尽くして、つくる闘いを拒わない限り、自らが、つくることぬきに存在しないということをとらえかえしてきました。そして、どのような条件で、どのようにつくるかでは、やはり、運動的発展、戦術のつみかさねの、軍事の実践から創ろうとしていました。その行動の中で、どれだけ味方を一つにしていくか、自分たちを変革していくかと、とらえきれず、敵を、どう物理的に解体していくかを中心に考えていました。（ちなみかのみに終始した勢力は、ずいぶん霧散していきました。どう敵をたたく中で、味方を統一していくのか、を、中心として考えた勢力は、この一〇年の間に、指導力を実践的にたくわえました。）

（六面中段へつづく）

軍備増強路線のウラオモテ

＞1＜

わが国の支配階級は軍備増強路線に転換した。これは第二次大戦後の日本の政治にとって大きな曲り角である。この日本の政治の大きなターニングポイントのもつ意味について、国際情勢、国内経済、国内の政治情勢と人民の闘いの三つの側面から追及していく。第一回は、国際情勢。支配階級は日本の軍備増強の理由をソ連の軍事的脅威に対抗するためと説明している。しかしこの説明は本当だろうか。米日を含め西側の多国籍企業がこの二十数年来とりくんできた、東側経済を資本主義市場のなかに統合してしまうとする壮大な計画と矛盾しはしないだろうか。アフガンへのソ連の侵攻とカータードクトリン、西側の軍備増強は、多国籍企業の膨大な戦略と衝突するのだろうか。

進む米ソゆ着構造

アフガン侵攻に拘らず

多国籍企業の活動の真心倒産でありながら経済関係はつづけている。

こうしてみると西側のソ連圏に対する政策は経済関係でみているのは、自分の組合員である西側の労働者ではないかという事だが、その意図をこえて、興味ある事実が次々に展開されている。

「ウォッカ＝コーラ」と「配者のゆ着構造を指している。

「現代では兵器の調達は国際的になっており、時には資本主義諸国が巨額の軍事予算を維持する必要があるとさえ輸出可能なのに〝国家的〟な国防予算を増額するというのは論理的に矛盾はならないが、それこそ「ウオッカ＝コーラ」的な構造の核心である。

共産主義諸国の専制政治的、労働者抑圧的な体制はいわれてきたが、むしろ今は軍産複合化のなかで、海外市場を拡げ多国籍企業は、利益をえられるように変ってきたのである。このことは、世界リスト長岡瑞氏も同様の指摘をしている（同書八五ページ）。

軍備増強は米ソデタント＝東西市場統合計画と矛盾するものではない。対ソとということで増強される軍備は結局どこに向けられる事になるのか。これについては戦後の米外交政策の分析からでてくる結論だが、それ以上に詳細にあつかう余裕はないので結論だけいえば、第三世界の反帝勢力である。

年から今日にいたるまでそう非同盟を選択する。イラクの損失をうめることも、低落傾向をくいとめることもできないでいる。

☆米ソを比較する場合大切なことは、ソ連の影響力のある国が東欧をのぞいて途上国であり、ワシントンの同盟国は先進開発国だという事だ。

☆中国、インドネシア、エジプト、インド、イラクにおけるソ連の後退はソ連の影響力を縮少した。

このレポートで大事だと思うことは、ソ連が第三世界で永続性のある影響力を確立することに成功していないという事である。

インドシナ半島でも、アフリカの角でも、南アフリカでもそうである。一旦ソ連の影響力が及びながら、大敗している。今エチオピアがそうならろうとしている。ソ連の軍事援助をうけているエチオピアのメンギスツ政権は、エリトリア解放勢力に軍事的な大敗を喫してしまい、倒れかかっている。最も激しい反帝国闘争のおこっている地域であるアフリカ自治交渉」は、完全に暗礁に乗り上げたまま、五月二十六日、交渉の最終期限が過ぎた。交渉自体は、これで打ち切られるわけではないが、ベキン、サダト共に国内に矛盾を抱え、カーターも十一月の大統領選を控えて何ら打つ手がなく、交渉再開の見通しは全く立っていない。こうしたなかで被占領地、南部レバノンでの戦闘の激化、ECがPLOを含めたパレスチナ問題の解決を積極的に推進する情勢をつくり出す一方、反帝勢を軸に、アラブ強硬派諸国、各国の解放闘争との結びつきを強化しており、この反帝勢力の統一がどこまで強化されるかが、今後の情勢の鍵を握っているといえる。

☆ソ連は一九五〇年代に中国を失ったが、一九六〇年代に永つづきしていない。むしろ影響力の拡大に成功するが、ソ連は期待し、ソ連は「和平」作戦に相反するものではなく、「ウッカ＝コーラ」作戦の第三段階を示すものだと主張し、次のように指摘している。

「『ウオッカ＝コーラ』最初の版で描かれた初期の段階は、資本主義諸企業のソ連・東欧での共同生産の広範囲なネットワークの建設だった。それは技術輸出と低利の信用供与、低賃金ストライキも無いという労働力を基礎としたものだった。デタントは、この段階での政治的同伴者だった。

第二段階は、同様な関係を中国で発展させることで、それは一九七八年暮れ、アメリカと中国との国交正常化で祝福された。

第三段階は、ソ連のアフガニスタン侵攻に特徴づけられるもので、「デタントは死んだ」という虚偽の陳述が眼やかに驚き立てられたことは、『政治的な表面と経済的現実は食い違ってはならないが、違っているように見えなければならない』という『ウオッカ＝コーラ』原則の証明だった。」（同書上巻三五〇ページ）

軍備増強と東西ゆ着とが矛盾するものでないことを著者は次のように指摘している。

「現代では兵器の調達は国際的になっており、時には資本主義諸国が巨額の軍事予算を維持する必要があるとさえ輸出可能なのに〝国家的〟な国防予算を増額するというのは論理的に矛盾はならないが、それこそ「ウオッカ＝コーラ」的な構造の核心である。

共産主義諸国の専制政治的、労働者抑圧的な体制はいわれてきたが、むしろ今は軍産複合化のなかで、海外市場を拡げ多国籍企業は、利益をえられるように変ってきたのである。このことは、世界リスト長岡瑞氏も同様の指摘をしている（同書八五ページ）。

軍備増強は米ソデタント＝東西市場統合計画と矛盾するものではない。対ソとということで増強される軍備は結局どこに向けられる事になるのか。これについては戦後の米外交政策の分析からでてくる結論だが、それ以上に詳細にあつかう余裕はないので結論だけいえば、第三世界の反帝勢力である。

☆米ソを比較する場合大切なことは、ソ連の影響力のある国が東欧をのぞいて途上国であり、ワシントンの同盟国は先進開発国だという事だ。

☆中国、インドネシア、エジプト、インド、イラクにおけるソ連の後退はソ連の影響力を縮少した。

このレポートで大事だと思うことは、ソ連が第三世界で永続性のある影響力を確立することに成功していないという事である。

インドシナ半島でも、アフリカの角でも、南アフリカでもそうである。一旦ソ連の影響力が及びながら、大敗している。今エチオピアがそうならろうとしている。ソ連の軍事援助をうけているエチオピアのメンギスツ政権は、エリトリア解放勢力に軍事的な大敗を喫してしまい、倒れかかっている。最も激しい反帝国闘争のおこっている地域であるアフリカ自治交渉」は、完全に暗礁に乗り上げたまま、五月二十六日、交渉の最終期限が過ぎた。交渉自体は、これで打ち切られるわけではないが、ベキン、サダト共に国内に矛盾を抱え、カーターも十一月の大統領選を控えて何ら打つ手がなく、交渉再開の見通しは全く立っていない。こうしたなかで被占領地、南部レバノンでの戦闘の激化、ECがPLOを含めたパレスチナ問題の解決を積極的に推進する情勢をつくり出す一方、反帝勢を軸に、アラブ強硬派諸国、各国の解放闘争との結びつきを強化しており、この反帝勢力の統一がどこまで強化されるかが、今後の情勢の鍵を握っているといえる。

世界の動き

中東に新たな激動

キャンプデービッドの合意に基く、米、イスラエル、エジプトによる「パレスチナ自治交渉」は、完全に暗礁に乗り上げたまま、五月二十六日、交渉の最終期限が過ぎた。交渉自体は、これで打ち切られるわけではないが、ベキン、サダト共に国内に矛盾を抱え、カーターも十一月の大統領選を控えて何ら打つ手がなく、交渉再開の見通しは全く立っていない。こうしたなかで被占領地、南部レバノンでの戦闘の激化、ECがPLOを含めたパレスチナ問題の解決を積極的に推進する情勢をつくり出す一方、反帝勢力の統一がどこまで強化されるかが、今後の情勢の鍵を握っているといえる。

キャンプデービッドの路線が頓座した最大の要因はパレスチナ、及びイラン人民の闘いの前進である。PLOは、キャンプデービッドに対抗し、積極的な外交攻勢を展開、パレスチナを代表する唯一の政府としての承認を国際世論の中で確立した。これによって「和平」は、大義名分を失い、サダトはアラブで完全に孤立した。「和平」を更に決定的な破綻へと追い込んだのが、イラン革命のアラブ諸国への波及である。

こうした中で、PLOは五月始めに被占領地内で軍事作戦を展開、ベギンを足元から揺さぶり、ECの動きを利用して有利な国際情勢をつくり出す一方、反帝勢力の統一がどこまで強化されるかが、今後の情勢の鍵を握っているといえる。

永続きしない影響力

第三世界で失敗したソ連

アフガニスタンのソ連侵攻以来、カーター米大統領は、「中東は西側の生命線」的な危険な国家だと宣伝するとカータードクトリンを公表、西側各国に、防衛力の増強を強要している。日本上陸するかもしれないというデマがふりまかれる。しかし、ソ連の対外政策、影響力については、長期的な客観的な冷静な分析が必要だ。

日本で沖縄に対する米軍の影響力は安定性を欠いている。長期間にわたって外国に対する影響力を蓄積していく事ができない事が、ソ連の顕著な特徴となっている。

☆政治、経済、軍事的な対外拡張について、非常に低い水準から出発したソ連は、その影響力を拡大してきた。一九四五年には世界の国家の六％から出発して、一九五〇年代の終りの投票態度、公式声明、公式訪問、貿易などの角度から追及している。

その結論を要約すると——

☆ソ連は十九である。

☆ソ連は一九五〇年代に中国を失ったが、一九六〇年代に永つづきしていない。むしろ影響力の拡大に成功するが、ソ連は期待し、ソ連は「和平」作戦に相反するものではなく、「ウッカ＝コーラ」作戦の第三段階を示すものだと主張し、次のように指摘している。

「『ウオッカ＝コーラ』最初の版で描かれた初期の段階は、資本主義諸企業のソ連・東欧での共同生産の広範囲なネットワークの建設だった。それは技術輸出と低利の信用供与、低賃金ストライキも無いという労働力を基礎としたものだった。デタントは、この段階での政治的同伴者だった。

第二段階は、同様な関係を中国で発展させることで、それは一九七八年暮れ、アメリカと中国との国交正常化で祝福された。

第三段階は、ソ連のアフガニスタン侵攻に特徴づけられるもので、「デタントは死んだ」という虚偽の陳述が眼やかに驚き立てられたことは、『政治的な表面と経済的現実は食い違ってはならないが、違っているように見えなければならない』という『ウオッカ＝コーラ』原則の証明だった。」（同書上巻三五〇ページ）

軍備増強と東西ゆ着とが矛盾するものでないことを著者は次のように指摘している。

「現代では兵器の調達は国際的になっており、時には資本主義諸国が巨額の軍事予算を維持する必要があるとさえ輸出可能なのに〝国家的〟な国防予算を増額するというのは論理的に矛盾はならないが、それこそ「ウオッカ＝コーラ」的な構造の核心である。

共産主義諸国の専制政治的、労働者抑圧的な体制はいわれてきたが、むしろ今は軍産複合化のなかで、海外市場を拡げ多国籍企業は、利益をえられるように変ってきたのである。このことは、世界リスト長岡瑞氏も同様の指摘をしている（同書八五ページ）。

軍備増強は米ソデタント＝東西市場統合計画と矛盾するものではない。対ソとということで増強される軍備は結局どこに向けられる事になるのか。これについては戦後の米外交政策の分析からでてくる結論だが、それ以上に詳細にあつかう余裕はないので結論だけいえば、第三世界の反帝勢力